



## 会報 2025 年 7 月号

日本ニュージーランド協会 (関西) 創立 1970 年 11 月 11 日

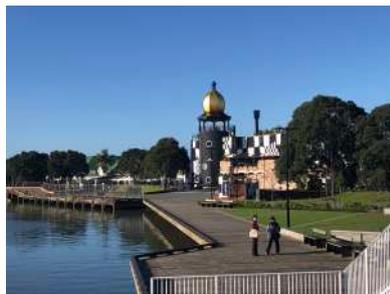
New Zealand Society of Japan, Kansai

### Designing Future Society for Our Lives

いのち輝く未来社会のデザイン

「万博へ行きましたか？」が挨拶言葉になっていますが、4月13日の開幕以来次第にマスメディアなどで万博が多く採り上げられるようになりました。ニュージーランドは今回参加しておりませんが、会場の空気を吸う気持ちで一度は見学されてはどうでしょうか。人気パビリオンの予約は難しそうですが、楽しいハプニングも期待できそうです。

70年万博のNZ館で上映された「This is New Zealand」はNZの自然・社会・産業・人々を多角的に紹介しております。You-Tubeで観ることができます。



(フンデル・ヴァッサー美術館)



(マリナー)



(ファンガレイ滝)



(釣り針橋)

第 296 回例会 甲子園歴史館・スタジアム見学会 7月19日

(さかいケイツミか氏提供)

第 297 回例会 ラム肉調理会 9月13日 とよなか国際交流センター

【事務局】日本ニュージーランド協会 (関西)

〒558-0004 大阪市住吉区長居東 2-17-28, 407

電話・Fax:06-6607-2112

<http://nzsocietykansai.com> E-mail:[nzsjk@yahoo.co.jp](mailto:nzsjk@yahoo.co.jp)

---

## ■ 甲子園歴史館見学ご案内 （第 296 回例会）

3 年前にリニューアル開館、球場・阪神球団・高校野球の歴史が学べます。スタジアムツアーにも参加し、ロッカールーム・スタンド・特別室も見学できます。野球にあまり関心ない人も楽しく見学できます。NZ には野球協会があり、日本人が指導していると聞いたことがあります。NZ の野球事情につきご存じの方は教えてください。

と き: 7 月 19 日 (土) 10 時 30 分～12 時 30 分

ところ: 甲子園歴史館前集合 阪神甲子園駅 (梅田から特急で 25 分) 徒歩 3 分

定 員: 15 名 参加費 2000 円 (各自払い)

昼 食: 隣接のカフェを予定 (お申込者にはご連絡します)

キャンセル料: 7 月 18 日 13 時以降は 100% のキャンセル料が掛かります。

## ■ ラム肉調理会ご案内 （第 297 回例会）

人気ある恒例のラム肉例会は昨年と同様にアンズコ・フーズ様の協賛をいただき開催します。美味しい NZ 産ラム肉・アイスクリーム等を楽しみましょう。友人などの参加も歓迎します。

と き: 9 月 13 日 (土) 14 時 15 分～16 時 45 分

ところ: とよなか国際交流センター 阪急豊中駅徒歩 1 分

参加費: 3500 円 アルコールなど持ち込み可

定 員: 25 名 申し込み締め切り 9 月 1 日 エプロン・マスクをご持参ください。

\* 8 月に詳細をお送りします。

## ■ 秋以降の例会 (予定)

秋の遠足・NZ 大使館などの見学・クリスマス等の例会を予定しています。ご提案等を事務局へお寄せください。

## ■ 会員募集

友人・知人でニュージーランドに関心ある方をご紹介します。

## ■ 花博には参加しました。

会報編集担当から万博について原稿を依頼されました。ただ万博は前世紀の遺物との指摘もあり、さらに未来展望の持てない世界の現状を知れば、今回も含め万博にはあまり興味がありません。大金を払って、暑い中をうろつくのは大変です（元来、旅行も仕事以外はあまりしません）。昨年患った膝の痛みが再発します。愛知や筑波開催になるとさらに旅費・宿泊費も掛かります。それで、唯一参加したのは花博（大阪の鶴見緑地、1990）です。おそらく花博での NZ ナショナルデーに参加すべく、当時の川瀬会長から招待券を頂いて家族4人、とくに小学生の子供が喜ぶと考えてだったのです。それで書けるような内容が乏しく、以下では世界の現状として今話題のトランプ現象（何故トランプがアメリカで人気があるのか）と私が専門である紙材料（この3月に、“プラスチックから紙へ、紙材料学入門”として文芸社より販価1200円で発行）との間でどのように関連するのかについての知人の意見を紹介します。近年アメリカでの新聞紙需要が激減しています（日本も減少しているが、配達制度があるので、ある程度救われている）。裏を返せば、アメリカ人の半数（トランプ支持者）はネットで情報を得ています。たしかに日本でも特に若者は、ニュースはネットやテレビで見れる、として新聞を読まないのですが、これは大きな誤りです。新聞ではニュースそのもの以外に関連する解説や論評、それも確かな人が書いた記事が掲載されて、これらを読むことが重要なのです。例えば5/22付けの朝日新聞では“米国の大いなる誤り”と題して経済学者岩井克人さんが、自国第一との考えから米国が基軸国の恩恵を失うことを説明しています。また“トランプ支持者の心性とは、取り残された”赤の州“の憎しみ”と題して政治思

想学者重田園江さんが、米国における貧富の差が大きくなって、大金持ちのトランプやマスクが、彼らが元来すべき所得再分配をせず、富は移民に取られたと説き、敵を作って対立をあり、さらにリベラルインテリ層を悪者に仕立てあげていることを解説しています。本や新聞から得られる知識・考えは膨大だし、勿論新聞によっても、言論人によっても言説は異なるので最後は各人が有する知識と経験から判断しなければなりません。実際本を読むことは経験することに置き換えられるので、新聞や本を読み、歴史を学ぶことは近代人にとって非常に大事なのです。ところが、ネットが大きくなり、子供の頃から本も新聞も読まない、“活字離れ”で情報・知識は全てスマホ・ネットで済ます人が増えたのです。さらに悪いことにコンピューターは間違わないから、そこからの言説も確かと思ひ込み、ネット情報は信頼できると誤解している人が昨今増えたのです。おそらくトランプ支持層がそうだろうし、勿論、日本でも同じで、兵庫県知事選挙等の SNS 問題然りです。皆さんには新聞や書籍紙面にある活字を読むことは非常に大事なこととして肝に銘じておいて下さい。

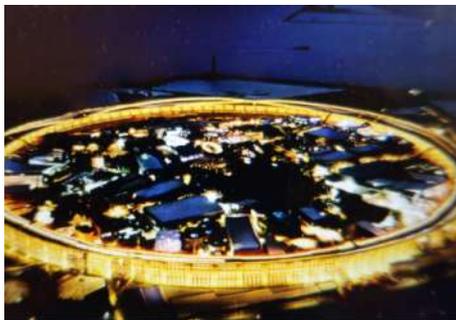


(山内 龍男)

## ■ 万博（1970・2025）

1970年のこんにちは ♪♪♪ 三波春夫氏の歌声で始まった千里丘陵での大阪万博は、世の中す

べてが上向きで活気に満ち溢れていました。私の友人も、東京や仙台から再三やって来ました。狭いアパートで寝泊まりしてもらって会場まで通いました。入りたいパビリオンはどこもかしこも長い列、小さな子供連れでは並んで待てないので、空いているパビリオンをウロウロしていました。疲れたら遊園地エリア（エキスポランド）へ行ってジェットコースターや宇宙線シャワーに乗って楽しみました。乗り物にはいっぱい乗りましたが、並ぶのが嫌で日本館もアメリカ館もソ連館も観ないままで万博は終わってしまいました。（10 数回も行ったのですが）55 年が過ぎ、夢洲で関西・大阪万博始まり 2 ヶ月半が経ちます。入場者からは次々と課題や要望が出されていますが、その都度改善されているようです。とすれば閉幕時が最高なんでしょうね。今回は何度も行けそうにありませんが、清水の舞台と同じ工法で世界最大の木造建築物と言われている大屋根リングで散歩をしてヘルスケアパビリオンで、20 年後のアバターと会ってみたいものです。再生医療で顔はツルツル、髪は真っ黒と想像は広まりますが、現実は多分、千の風になってその辺りを飛び回っていると思います。歯科・眼科・内科・整形外科と忙しい毎日ですが、気候が良い時に、大屋根リングからの夕焼けを是非観たいと思っています。百間は一見に如かずですよ。



(埴 幸子)

## ■ 1970 年大阪万博と 2025 年大阪・関西万博



(ラトビア・ナショナルディ)

4 月 13 日の開幕以来、大阪・関西万博に 3 回行って来ました。最初は家族で 2 回目は友人と 3 回目は招待で。3 日とも大変混雑していましたが、主催者は並ばない万博を掲げていましたが、人気パビリオンは予約が取れなくどこへも入れない万博になっていました。これで 7500 円は高すぎです。ぼったくりみたい！3 回目は 5 月 20 日のラトビア共和国のナショナル・ディで幸運にも VIP 扱いのため入り口で並ぶこともありませんでした。ご存知のようにラトビアは、バルト 3 国の中央にあり元ソビエト連邦の国で、人口は NZ（約 500 万人）より少なく約 188 万人で国土は NZ（約 27.5 万 km<sup>2</sup>）の約 4 分



(70年万博風景)

の1 (約6.5万km<sup>2</sup>)です。主な産業は農林・水産業ですが、今後はITにも力を入れるようです。これまで経済発展が進まず、首都リガは古い町並みが残り世界遺産に登録されています。大統領も臨席されたナショナル・ディの会場で伝統的な踊りと合唱を楽しみました。午後には、ビジネス・セミナーもあり小国ながら日本への意気込みを感じました。少し70年と今回の比較をしてみます。

70年の万博は日本経済が高度成長途中で、一般的には海外観光旅行はまだ普及していませんでした。万博で世界中の自然・文化・科学技術・料理を体感する事が出来て、非常に魅力的で感動的だったと思います。私は大学4回生で感受性も今よりは豊かだったこともありましたが、「人類の進歩と調和」のテーマを感じることができました。参加した国内・外国パビリオンも知恵を絞り、多くの資金・人材を投入して積極的でした。

一方、今回の万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」はあまり理解できません。先進国側の出展意欲があまり感じられない様に思

いました。先進国は知名度もあるし、これ以上はオーバー・ツーリズムになるし、簡単な展示で、映像だけ見せておいたらいいや！くらいのパビリオンが多かったです。ウクライナや中東での戦争の影響もあるのではないのでしょうか。

他方、発展途上国の方が観光や商品の売り込みに積極的な姿勢を感じました。

NZに関しては、55年前は独自のパビリオンを設け、大盛況であったにも拘らず今回は出展取り止めとなり非常に残念です。出展していれば当協会を挙げて応援出来たのではないかと思います。戦後に生まれ、高度成長期の波に乗り2度のオリンピック、2度の万博を見ることが出来て感謝しております。

(中村 重夫)

## ■ 万博 1970年と2025年について

1970年の大阪万博のテーマは、『人類の進歩と調和』でした。この時は、私は建築学科の学生であったため、特にパビリオンや新しい技術を見ることができると、夢が果てしなく広がる状況でした。何とか早く見たいと思い開幕少し前、アラブ連合のパビリオンの屋内展示のアルバイトをしていました。このおかげで、アメリカ館の月の石も、休憩の時に自由に見ることができました。



(立体トラス部分)

特に構造について注目したことはこの時初めて見た、お祭り広場の屋根を支える、立体トラ

---

スでした。大学でも部材の破壊試験が行われていました。(今では学校の体育館などの屋根では、あたりまえの工法となっていますが)

デザイン的に心に残ったことはスイス館の光の樹が印象的でした。昼間は規模の大きなモニュメントだなど思っただけでしたが、夜になって光がともると、光り輝き、その光は会場のどの位置にいても、確認できるくらいで、羅針塔のようでもあり、光に向かって虫が集まるように、人がどんどん集まる様子を見て、光のすごさを心に焼き付けました。



(光の樹)

さて、2025年大坂・関西万博のテーマは、『いのち輝く未来社会のデザイン』です。残念ながら今回の万博については、まだあまりよくわかっておりません。5月中頃、ラトビアのナショナルデーの見学に行ったとき、全体をざっと、見た程度です。人気のバビリオンへは、予約なしではなかなか入れそうにはありません。

会場全体の構成のイメージは日本最大級のフラワーパーク“とっとり花回廊”によく似ていると思います。これは、円状の展望回廊の内側と外側に、見せるべきものを配置する方法です。今回の万博会場では、基本、大屋根リングの内側に、外国パビリオンが配置され、外側に、日本のパビリオンが配置されています。



(とっとり花回廊の展望回廊と花壇)

大屋根リングの構造は清水寺などで見かける、柱に多くの貫という水平部材を差し込んだ、日本の建築の伝統的な構造を模した形になっています海に面している特徴を生かし、少し変割った景色も見ることができます。



(大屋根リングの一部)



(大屋根リングから花畑を通して海を見る)



(大屋根リングから内側を見る)

ラトビアのナショナルデーを見学でき歌や民族衣装の踊りに感動し、少しこの国について調べてみました。13世紀、ドイツ騎士団に占領され、また1944年にソ連に占領されると、国歌が歌えなくなりましたが、この中でも民族の誇りと団結のため、『歌と踊りの祭典』を開催し第二国歌の『風よそよげ』を歌い続けました。記憶にある方も多いと思いますが、1989年とともに『歌と踊りの祭典』を開催してきたバルト三国の国民200万人が、三か国の首都を結ぶ、600kmの間を、手をつなぎ人間の鎖を作り、独立に成功しました。



(人間の鎖)



(ラトビアの歌と踊り)

万博で、出会った国を、少し深く見つめるのも、『いのち輝く未来社会のデザイン』につながるのではないのでしょうか。

(山下 誠二)

## ■ Expo70 NZ 館コンパニオン 内村聡子 (旧姓) さん

5月17日の会員総会後1週間ほど経ったある日、事務局に70年万博のNZパビリオンでコンパニオンをされていた方から電話がありました。HPで当会のことを知ったそうです。当時の興味深いお話が伺えると思い急遽お会いすることになりました。スイスへ帰国2日前の急なことで皆さんに声掛けできなくて残念でしたが、お話の概要を書かせていただきます。電話の主は内村聡子(旧姓)さんで現在のお名前はブリアル聡子さん。佐賀のご出身、現在はジュネーブ在住。大阪で働き英語の勉強をしていた時、万博パビリオンのコンパニオン募集があり5つの国に合格されたそうです。NZへの関心・クリスチャン・デオールのデザインのユニフォーム・パビリオンに使われていた建材のラジアータレディパインがすべてNZから運ばれてきたことなどに感銘を受けてすぐNZに決められました。確かその当時1USドルが360円、1NZドルが505円、1オーストラリアドルが500円でした。NZはその当時世界有数の裕福な国だったのです。私も身近に地方自治体館のコンパニオンに採用された人がいましたが、大変な倍率だったと聞いたことがあります。当時、NZはまだ日本ではよく知られていなかった国で聡子さんのお話では、「ニュージーランドとニュージーランド人」がテーマのパビリオンは人気が高かったそうです。3面の大型スクリーンにNZの地理・歴史・自然・社会・人々の紹介、日本の陶芸家の影響を受けたキーウィの陶芸家

の作品・マオリの伝統工芸品の展示、お土産店もありチーズ・ワイン・レコードなども販売されていました。運が良ければキーウィの形をしたピンバッジが貰えました。館内2階のレストランではラム肉のステーキなどをキーウィのシェフが調理しフルコースのお料理は大評判だったそうです。屋外のガーデン・スナックバーでは軽食・ビール・ミルクシェイクなどが大人気。川瀬勇さん（後の当会初代会長）がパビリオンの許可を得て会員募活動をされたことを聡子さんはご存知ありませんでした。中庭ではマオリの踊りも披露されたそうです。多くの見学者との対応と暑さで仕事はハードだったらしいですが、万博で働く各国の人々とパーティなどで知りあい楽しかったそうです。私自身もチェコ・スロバキアとカナダのレストランで外国人とアルバイト（皿洗い・クレープ焼きなど）をしたので万博で働く楽しさと苦労？を経験し、聡子さんと共感するところが多くありました。NZパビリオンのスタッフは映像技師なども含め総数80名程度。聡子さんによれば、パビリオンは日本人たちにNZを知ってもらうのに大きく貢献したとのことでした。私もアルバイト後に美味しいアイスクリームを目当てに人込みをかき分けてNZパビリオンに向かったことがありました。その時、日本人と思ってコンパニオンの一人に話しかけたとき彼女がNZ生まれの中国系と知りました。本人から開拓時代に多くの中国人が労働者とし金鉱などで働いていたことを教えてもらい驚きました。白人とマオリの国と聞いていたので。聡子さんから彼女の名前（ウイニーさん）を教えてもらいました。聡子さんは万博で半年間働いていた時にフランスパビリオンで働いていたフランス系スイス人と知り合い2年後に結婚されたそうです。



(NZパビリオン)

万博後、大阪出身の元同僚コンパニオン（つい4年前迄時々連絡を取り合っていた）と二人、船でNZへ渡る途中、香港に寄港した際にウイニーさんは親戚訪問で香港に滞在していて各地を案内してくれたそうです。彼女はその後NZ航空のステュワーデスの仕事に戻りました。オークランドのNZ人の元コンパニオンのお家を起点とさせてもらって3ヶ月かけてNZを周りました。その間NZパビリオンの副館長のお宅や技術者・ショップの責任者・政府関係者・元同僚の何人かの人達に再会し皆さんに親切にしてくださいました。又、小学校訪問やウェリントン政府関係者、万博に親善大使として行った子供たちとの再会等に積極的に行動され新聞やメディアの取材にも応じ日本のこともPRされたそうです。滞在先では生け花・日本料理教室も開いたり（当時日本料理店は殆どなし）民間外交官のような役目をされたようです。楽しく旅行を共にした友人とは3ヶ月で別れた後に聡子さんは新聞広告で見つけたウェリントンの公認会計士事務所で7ヶ月勤務、2年契約すればいい条件で働ける大手企業からの誘いもあったそうですが、世界旅行を計画していたので諦めたそうです。NZからパナマまでの定期大型船は年2回しか就航しておらず、これを逃すと後6ヶ月待ちになるからでした。大型船のデッキからオークランドの街が見えなくなるまでいつまでも立っていたのが昨日の事の様だと言

われました。今回は、ご主人との出会いの場、大阪に来て万博見学を予定されておられましたが、ご主人が急な腰痛で来れなくなり、また当時の同僚とも十分な連絡が取れなく同窓会ができなかったこと、NZが万博に参加していないことを大変残念がっておられました。5月24日に箕面で開催されたNZフェスティバルは見学されました。聡子さんは、昨年から当会のホームページを見られていて万博直後に当会が設立され55年にわたり活動を続けている事が感慨深く、NZを愛する一人として感謝の気持ちと共にこれからも陰ながら応援していきますとおっしゃいました。次回に来日される時には是非、例会でお話を伺いたいと思います。

\*YuoTubeで「大阪万博1970 ニューゼaland館」と検索されると当時の様子が見れます。



(コンパニオンの皆さん)

(石井 久行)

## ■ 僕のNEW ニュージー

「将来、どうありたいのか」と悩んでいる僕は、偶然にも知り合いから声をかけてもらい、ニュージーランド(以下「NZ」という)でホームステイをさせてもらう機会を得た。海外に1カ月以上滞在したことがないが、現状を変えたい僕は迷うことなく神戸を飛び出した。そして、ワーキングホリデーの年齢制限ギリギリ滑り込みで、NZに入国したのである。NZについて、「羊が多い」「ラグビーが強く、ハカが有名」という

ことくらいしか知らない僕にとって、もちろん初めてのNZ。英語がわからず、何から始めればいいのかもわからないNZでの生活は、不安や失敗だらけだが、毎日のように新たな学びがある。そんな僕が体験した発見や驚きを、ここで記せたらと思う。

### ーフレンドリーな訪問者ー



(作業中でも、彼らは問いかけてくる。)

「スリスリ」と、ホームステイ先の猫たちがかまってほしそうにすり寄ってくる。猫や犬など日本で馴染みのある動物はもちろんなのだが、NZでは多くの生き物がとてもフレンドリーに感じる。野外でガーデニングをしていると、たくさんの生き物に出くわす。まずはファンテイル(マオリ語:ピーワカワカ)だ。NZではよく知られる小鳥で、ハイイロオウギビタキという和名の通り、立派なグレーの扇形の尾羽が特徴だ。ディズニーキャラクターをそのまま連れてきたような、ヒラヒラした愛くるしい動きと鳴き声で近づいてくる。まるで「何してるの〜?」と、問いかけるような彼らに、僕は出くわすごとに声を真似てコミュニケーションを取りたくなってしまった。ガーデニング中だけでなく、ベランダでティータイムを取っていても、頻繁にその様子を伺いに来る。他にも雑草抜きなどを

していると、カマキリなんかも近づいてくる。突然のできごとに驚いているだろうに、威嚇一つせず一定のリズムで体を揺らしながら、こちらの様子を覗き込んでいる。気付けば、僕の脚にくっついてきたことも何度かあった。やはり心なしか、日本のカマキリより人懐っこく感じるのである。人間と自然との距離が近いNZだからこそ、生き物もまたその環境に慣れているのだろうか。彼らと会話ができているような、そんな気分には僕は浸るのであった。



#### —望まぬ者—

そんな中、フレンドリーなのはご遠慮いただきたい生き物もいる。ハエだ。こちらが歓迎していないことはわかっているだろうに、陽気に飛んできては人間の体で休憩、もしくは食事を摂っていく。僕はハエが噛むというイメージがあまりなかったのだが、ハエが去った後止まっていた箇所からは、ジワジワと蚊に噛まれたような跡が浮かび上がってくる。「これはいかん!」と、ハエたたきを片手に戦闘態勢に入る。人間のことなど気にも留めていない様子のハエに、一撃を食らわせる。しかしそれをかわされようもんなら、少し経ってどこからかまた現れては「ここだぞ〜」と、あえて視界に入ってくる。逃げる訳でもないその所業は、人間をからかっているようにしか思えない。そんなハエとの戦いはまだまだ続くのであった・・・。



(頻繁に目撃する、お行儀良く待機する犬をパシヤリ。)

#### —人気者との出会い—

NZに来る前から、僕はプケコという鳥に会うのを楽しみにしていた。全身が黒や青紫色の羽毛に包まれ、くちばしと頭部の前面、脚が赤いとても鮮やかな鳥だ。知人から、あらゆる場所で見ることができるとは聞いていたのだが、NZに来て一番彼らを見かけるのは意外な場所だった。道路だ。そしてその出会いは何とも悲しいものでもあった。車を運転していると道路を横断する彼らによく遭遇するのだが、すでにロードキルされた(轢かれた)彼らの姿もまた頻繁に目撃する。飛ぶことをあまり好まないという彼らは、「はいはい、通りますよ〜」という具合に、少し急ぎ足程度で道路を横切る。勝手ながらも少し素早いと思っていたが、意外とそうでもない彼らを横目に「こんなタイミングで、呑気に横切るなよ!」と、こちらもヒヤヒヤしながら運転するのであった。NZでは、運転中動物が横切るとはよくあるのだが、変に避けてしまうと人間の身も危ない。そのため、現地の人々は泣く泣く撥ねることになる。僕はまだそのような場面に遭遇していないのだが、これからもないことを祈るばかりである。天敵がおらず、生息数が少なくないプケコだが、人

間の文明によって減少する事態は避けたいものだ。ちなみに、プケコと共に会うのを楽しみにしていたのが、NZの国鳥キーウィだ。この鳥が由来で、NZ人を「キーウィ」と呼ぶことが多い。長いくちばしと退化した翼が特徴だが、NZに来てからまだ出会えていない。飛べない鳥であるキーウィに、僕はどこかロマンを感じている。いずれ出会えるのを、楽しみに待たしましょう。



#### —ロマンティスト?なキーウィ (NZ) の人々—

事前に、NZには“一日の中に四季がある”という情報を入れてはいたが、まさかこれ程までとは…。僕がNZに来たのは、2月の下旬頃からだ。季節は日本と真逆になるので、夏のとても暖かい気候であった。日中サンダルで30分も外にいと、くっきりとその跡がわかるように日焼けをしていた。そんな日が続くかと思っていたある日、雨が降り始めた。「今日は雨かぁ」と少し気落ちしていると、5分も経たないうちに雨雲はどこかへ行き、日が差し込んできた。意気揚々と動き出すと、それを嘲笑うかのようにまた雨が降り出す。「なんじゃこりゃ!!」と、天候に振り回される僕だが、そんな日がその後も度々訪れるのであった。雨が降っては止んでが頻りに起こるので、よく虹を見ることができるというプチ贅沢があったりもする。

雨に関して、もう1つ驚いたことがある。それが傘だ。人間が人間たる所以である1つ

(だと勝手に思っている)の傘を、NZの人々は全然差さないのだ。Why?!面倒くさいのか?だとすればパーカーやレインコートを着ていてもいいはずだが、そのような人が多い訳でもない。だとすると、濡れることに関して鈍感なのだろうか。僕の好きな映画「ミッドナイト・イン・パリ」で、主人公とある女性が雨のパリが素敵なのだと言ったのを、傘を差さずに帰るシーンがある。そんなロマンティストな彼らに憧れたりもしていたが、傘を差さないNZの人々を見て、「冷たくない?」「濡れたら風邪引いちゃうよ」と思ってしまうのであった。まだまだロマンティストにはなれそうにない。



(相合傘の落書きは、キーウィ (NZ人) には無縁?そもそも、縦書きでないとしっくりこないなあ。)

#### —海を越えて繋がる感覚—

5月に入ると、少しずつ寒くなってくる。特に朝方と夜は冷え込むので、厚着をして一日をスタートする。だが厄介なことに、天気の良い日の日中はまだまだ暑いのだ。それこそTシャツ1枚で十分な程に。更にNZに来てから感じていた、ある違和感に気付く。その日の作業を終えようとする夕方の17時頃に、一番気温が上がるのだ。これまた厄介。体温や環境は人それぞれなので、自分に合った体温調整が必要な

のである。

そんな5月の上旬にガーデニングをしていると、ふと懐かしさを感じた。日本も5月に入り暖かくなってきたと情報が入っていた。日中の程良い暖かさに包まれながら、日本の気候と少しだけ繋がったような気がしたのだ。季節が真逆のはずなので、とても不思議な感覚だったが、日本にいる家族や友人も「今、同じような暖かさに包まれているのだろうか」と思う。1日の中に四季があるNZだからこそその体験だ。



### —真っ暗、ゆえの明るさ—

昨今睡眠に関する悩みや問題が多くある中、僕はどこでも快眠できるラッキーな存在だ。NZに来てからもよく眠れているのだが、日本ではなかったティータイムの習慣によって、利尿作用で夜中にトイレに行くことがある。ちなみに僕はコーヒーではなく、紅茶（ミルクティー）を好んで飲んでいる。寝る直前に部屋の電気を消す時にもわかるのだが、NZの暗闇は正に漆黑なのだ。特に今住んでいるファンガレイという地域の郊外では、光の公害がほとんどないため、日本の都会の暗闇とは全く違う。加えて昔

から寝相が良い方ではない僕は、夜中にトイレのためドアに向かうのだが、自分がどの方向を向いているのかさっぱりわからない状況に見舞われてしまう。真っ暗闇の中、そんな難関を乗り越えて用を足すのであった。

そんな地域で夜空を見上げると、日本では滅多にお目にかかれないような数の星を見ることができる。もちろん郊外の夜なのでほとんど無音に近いのだが、少し顔を上げると夜空はとても賑やかなのだ。鮮明度は違うが、日本からこんなに離れていても同じ星を見ることができるのは、中々神秘的だ。そんなエモーショナルに浸っている僕を月の光が照らし、頭の中で『Clair de Lune（月の光）』が流れている。



### 【筆者：コーヘー】

神戸生まれ神戸育ちで、現在ニュージーランド歴3カ月。仕事を見つけ、英語をマスターすべくNZへ。“猫と暮らす”という夢を、ホームステイ先ですでに叶えてしまう。動物とは、すぐに仲良くなれるタイプ。元々フィットネス関係の仕事に就いており、三度の飯より運動が好きで…いや、三度の飯も大好き。人生で体重に悩んだことはないが、NZに来てから絶賛増量中。趣味は、映画鑑賞とサウナ。NZの映画館で、日本語字幕なしの鑑賞に挑戦したが、やはり難しい…。NZに来てから、まだサウナや温泉に入れてはいないが、いつか行けたらいいな。

## ■ NZ 協会入会・7年経過

最近、あまり例会には参加できていないですが、ラム肉パーティーや京都散策など交流会には参加させてもらうことが多いです。また、以前オーストラリアに住んでいたのが日豪協会のパーティーに毎年参加しています。

さて、私自身の海外体験を紹介させていただきます。私は、学生時代にタスマニアに滞在していました。当時は、語学学校に通いながら、地元のソフトボール・チームで活動を行っていました。初めての海外でしたが、3か月の滞在で多くの外国人と知り合いました。特にオーストラリア人は気さくな人が多く、彼らとの交流は格別でした。すっかりオーストラリアが好きになりました。帰国後、大学に1年間戻りました。卒業後、再度オーストラリアにワーキングホリデーで訪れました。当時は、英語の学習と生活資金を稼ぐために農場で就労していましたが、過労と睡眠不足が原因で、体調を崩し帰国を余儀なくされました。本来なら、現地の大学に進学してから、その後は現地で就職したかったです。現在は、大阪で会社員をしています。機会を見つけて是非ニュージーランドを訪れてみたいと思っています。



(筆者：後列中央)

今回は、2回目の寄稿ですが、観光案内ボランティア活動のお話を紹介します。私は、大阪SGGクラブというボランティア団体に所属し



ています。10年前にボランティア登録しました。月1～2回の頻度で外国人観光客を大阪や京都などを英語や中国語で案内しています。仕事で外国語を使う機会がないため、ボランティア活動で海外の人々とつながっております。毎回、ゲストとは自然体で接すること、気さくに対応するように心がけています。この意識づけは、若いころにオーストラリアで経験したことが活かされています。そのため、家族を案内するときは、私自身が彼らの家族の一員のような感覚になることが多いです。また、案内が終了して別れるとき、ゲストから次回あなたが私の国を訪れたときは、私があなを案内すると言ってくれることもあります。実際に今まで二人のゲストと現地で再会したことがあります。海外にネットワークを構築できるようになりました。



会員の皆さまの中でニュージーランド人の友人や知人で来日される方がいれば、是非大阪SGGクラブに観光案内をお申し出ください。大歓迎です。現在、120名程度の会員が

います。男性より女性が多いのもクラブの特徴です。皆さん、海外通で語学堪能です。英語だけでなくスペイン語やフランス語、イタリア語、中国語など話せる人もいます。大阪 SGG クラブをよろしくお願ひいたします。案内費用は無料ですが、案内中の経費（交通費・食事）は負担していただいています。

(平瀬 拓也)

### ■ 箕面市ハット市国際協力都市提携 30 周年スペシャルイベント NZ フェア

2025 年 5 月 24 日（土）に、上記 NZ フェアが、「箕面キューズモール EAST エリア 1F」で開催されました。雨天にもかかわらず、多勢の来場者で賑わいました。同国際協力都市提携は、1995 年に箕面市と Hutt 市（NZ 北島・ウエリントンの隣）間で調印されました。

当 NZ フェアに、ハット市 Campbell Barry 市長を始めハット市訪問団 11 名の皆さま、駐日 NZ 大使館の Gareth Pidgeon 公使、宮崎エグゼクティブオフィサー、また日本 NZ 協会（関西）の石井久行会長と会員の皆さま、NZ 学会太谷亜由美会長と先生方もご来場でした。太谷学会長は、箕面市で 2025 年 8 月に開催予定である「NZ 検定」についての説明をステージ上で発表されました。



(ナ・ハゥ・エ・ファのパフォーマンス)

また多くの箕面市民が、NZ フェアの演目の一つである「ナ・ハゥ・エ・ファ」の迫力に圧倒されたり、7店のブースで珍しい味わいを楽しんだり、体験したり、NZ 産銘柄ワインの試飲を楽しむブースもありました。

#### 【プログラムの概要（11：00～17：00）】

- 開演のアナウンス
- 箕面市長挨拶
- ハット市長挨拶
- 来賓の紹介
- ハット市訪問団、NZ 大使館公使、
- 箕面市議会議長・教育委員会教育長
- 各ブース（7）の紹介
- 彩都の丘学園 ダンス部出演
- ナ・ハゥ・エ・ファ（1 回目）
- NZ 学会・NZ 検定の説明
- ナ・ハゥ・エ・ファ（2 回目）
- 終了のアナウンス



(Barry 市長、Pidgeon 公使)

#### 【箕面市ハット市友好クラブのブースを紹介】

Barry 市長、Pidgeon 公使、そして 1970 年大阪万博当時に NZ パピリオンのコンパニオンをされており、現在はジュネーヴに在住のブリアル内村（旧姓 内村聡子）氏など約 165 人の人々が本クラブのブースへ来てくださいました。今回が初めてのことで、「こどもの都市（ま

ち)Mini Mi~no (ミニミ〜ノ)」とジョイント出店しましたので、テントは2張りとなりました。テントの設営などは、主に本クラブの男性陣の貢献によるものでした。

大きなヒツジのぬいぐるみ、翻訳・出版本、20周年記念誌、入会案内書、英語サロンのチラシなどを展示。そして今までのイベント写真などをラティスに貼って展示しました。

また、綿菓子の販売もしました。ヒツジのマスコット作りや缶バッジ作りのワークショップには、原田亮箕面市長がご家族と一緒に来場で盛り上がりましたし、参加者全員に達成感を得ていただいたようです。

缶バッジのデザインは、NZ出身の箕面市国際交流員によるもので、NZの雰囲気表現に最適のキウイ鳥やヒツジ、そして箕面のサルやモミジがモチーフとなっており、箕面市とHutt市の繋がりを永遠にする象徴となりました。大人も子どもも大喜びの缶バッジでした。

NZ側の協力的姿勢が優れた今回のスペシャルイベントNZフェアが、両市間の絆を強固にするものと期待し、またNZに関する各団体様のご来場に感謝申し上げ、今後、本クラブとの連携に進展がありますように願っております。

(箕面市ハット市友好クラブ 六角 みよ子)

## ■ 事務局への寄贈書

三重日豪ニュージーランド協会宮本忠前会長・宮本由紀子会長から共著「ニュージーランドを旅する46章・明石書店刊」をいただきました。豊富な体験をもとに書かれた本書はNZ旅行を計画されている人に大変参考になります。松沼清司副会長の旅行記等も事務局にご連絡いただければ貸出いたします。



## ■ 50周年記念会員総会・懇親会

当初予定通り5月17日に開催しました。議事要旨を同封しますのでご一読下さい。協会運営・例会へのご提案は事務局へお寄せください。

## ■ 年会費のご請求

皆さんからの年会費(3000円)で当会は運営しております。8月末までにお振込みをお願いします。会員総会で既にいただいた方は対象外です。手数料はご負担ください。

ゆうちょ銀行

記号 : 14110

番号 : 56529351

普通口座 : 5652935

名義 : 日本ニュージーランド協会(関西)

## ■ ホームページ充実への寄付金お願い

会員総会で55周年記念としてホームページの充実とその為の寄付金募集が承認されました。1口1000円です。ご協力をお願いします。振込先は年会費と同じです。ホームページの充実化についてのご提案と編集にご協力いただける方は事務局へご連絡ください。